



ぶらり相生第6号
平成29年8月

「大日本輿地全図の作成を企画した

ただたか
伊能忠敬一行も相生を訪れていた」

今回は、50歳から大好きな地図の測量を猛勉強し、ついには73歳で「大日本沿海輿地全図」の測量（残念ながら地図作成作業途中で亡くなる）を完成させた伊能忠敬に関する“ぶらり”です。



忠敬（源六一三郎右衛門—伊能三郎右衛門忠敬）が、暦学を本格的に学び始めたのが、寛政12（1800）年です。世の中は、北海道根室にロシア人ラクスマンが現れたり、世界的な潮流に日本が巻き込まれようとしている時代です。ちなみに、忠敬の名前は、当時の大学頭林鳳谷から名付けられています。

忠敬は、宝暦12（1762）年に、酒造家の伊能家に婿入りし、酒造・醤油・貸金業まで事業を順調に拡大していきます。寛政6（1794）年隠居願いを申し出、地頭所が受理し（何度も却下されている）、ようやくのことで暦学の勉強を本格的に始めることができます。忠敬50歳の時で、江戸に出向き、時の天文方高橋至時（当時31歳）の弟子になります。着々と頭角を現し、全国の測量に携われようになります。

さて、測量は第十次にわたって幕府直轄事業として展開されます。相生には、第五次測量で訪れます。時は、文化2（1805）年、忠敬60歳の時です。

行程について、伊能忠敬一行は、室津から相生浦までの海岸線を、高橋善助（至時の孫）一行は山を越えて相生浦まで、さらに那波村までを測量しました。当時の相生の中心地は、現在の旭地区の北の那波村と相生村でした。余談になりますが、高橋善助の父景保は、有名なシーボルト事件に関わったとして獄死します。

相生は、歴史の転換期に関わる人物とクロスする町なんですね。